

情報モラル教育の必要性 と指導カリキュラム

体系的に的確な判断力の育成を

情報モラル教育とは

モラルとは『①道徳。倫理。習俗。②道徳を単に一般的な規律としてではなく、自己の生き方と密着させて具象化したところに生れる思想や態度。』（広辞苑）とあり、社会に生きていくうえの基礎となる善悪の判断力や主体的な態度のことをいいます。したがって、情報モラルとは、「**情報社会を生きぬき、健全に発展させていく上で、すべての国民が身につけておくべき考え方や態度**」と考えることができます。情報教育のねらいを体系的に記述した「情報化の進展に対応した初等中等教育における情報教育の推進等に関する調査研究協力者会議第1次報告（1997）」でも、情報モラルは「情報社会に参画する態度」のなかの重要な柱の項目になっています。

ところで、わが国の情報モラル教育の目的には、いわゆるモラル教育の観点とは別の側面があります。それは「情報社会に的確な判断ができない児童生徒を守り、危ない目にあわせない」、すなわち**危険回避（情報安全教育）の側面**です。特に、情報モラル教育のなかで、現在、緊急に対処しなければならないのは、安全教育の側面と考えられています。確かにネットワークではさまざまな問題が起こっており、児童生徒を不用意にネットワークに参加させることは、予想もできない危険にさらすことになりかねません。しかし、モラルは、様々な場面での的確な判断力を養う礎^{いしづ}になるのですから、ただわけもわからず危険を避けるノウハウを教えるだけでは困ります。情報モラルは、情報教育のねらいである「情報社会に参画する態度」の育成、ひいては「情報の科学的な理解」「情報活用の実践力」の育成のバランスのなかで育成することが求められるわけです。

情報モラルと日常モラル

情報モラルの具体的な目標を体系的に整理していくと、道徳などで扱われている「日常生活におけるモラル（日常モラル）の育成」と重複する部分が多いことがわかります。道徳で指導する「人に温かい心で接し、親切にする」「友達と仲よくし、助け合う」「他の人とのかかわり方を大切にする」「他人を大切にする」などは、情報モラルで指導する「自分の情報や他人の情報を大切にする」「相手への影響を考えて行動する」「自他の個人情報を、第三者にもらさない」などの基盤と考えられます。道徳においては、そのカリキュラムの軸のひとつとして、

(1) 主として自分自身に関すること

(2) 主として他の人とのかかわりに関すること

(3) 主として集団や社会とのかかわりに関すること

などの視点から内容が展開されていきますが、情報モラルではその「集団や社会」が仮想的（バーチャル）な関係も含めた「情報ネットワーク社会」に置き換わるだけと考えてもいいわけです。しかし、日常の社会では、個人、家庭、地域社会と順に経験しながら、ゆっくり時間をかけてその関係を理解していくことができるのに対し、情報ネットワークでは、端末の前に座ってネットワークに接続した瞬間、あるいは携帯電話を手にし、コミュニケーションを開始した瞬間に、見えない人とのつながりや社会との接点と同時に生じてしまう点が異なります。したがって、一方では、即座に出合うかもしれない危険をうまくさける知恵をさずけることが求められますが、長い目で見れば、情報社会の特性やネットワークの特性の理解をすすめる、自分自身での的確な判断力を育成することが求められるわけです。ここに**情報モラル教育を体系的に推進していく必要性**があります。